追慕の辞

追慕のことば

本日みな様とご一緒に宗箇様を追慕して宗箇祭りを奉納申し上げますにあたり、皆様に代って追慕の辞を一言お供え申します。

上田主水正重安様剃髪され、宗箇と称され、この浅原崎城においで下さいましたのが元和六年（一六二〇）三八二年前のことでありました。

宗箇様が五十八才のときで約一ヶ月いられすぐ浅野泉邨のご造営にあたられ元和十年（一六二四年）再度お出で下さって約三年ごゆっくりなさったのでありました。

茶を点て、四季の風物にお楽しみになりながら、お茶碗を作くられ、お茶道いろいろなものをお作りなりながら、お茶人とされての月日であられましたことでありましょう。

ここから半里（二キロ）も行けば、周防の国との国境いというご所領の一番西果この浅原崎城で、ご帰藩お願いのご使者を断り続けられての三年間だったのでありました。

浅野藩上席家老という上田宗箇様が地域の住民に名染み深くして下さって来ましたときに、酒宴にも出て下さって、杯を一人一人と交してお帰りになっていたようでありました。

そのある日のエピソードに杯を交せなかった一人があったと庵からまたお出ましになって、杯をお交し下さってお帰庵なさったそうであります

一人一人を大事にして下さる宗箇様であられました。

地域の住民とお茶を共にして下さる日々を是れ好日として下さった宗箇様でありました。

そうした宗箇様を浅野藩主浅野長晟公がこの地にお迎えにこられ、断り切れず、ご帰藩なさったのでありました。

三年間ばかりの宗箇様から頂いた温いお心、お人柄に、別れを惜しんで村境の保曽原までお見送りし、泣いてお別れしたそうであります。

それから浅原で、崎城で、宗箇様を追慕して宗箇講をつくり毎年

お祭りをして来たのでありました。そのお祭のご幣を今は水脈が変って水が涸れましたが、宗箇様が日常ご愛用だったお手形の池のそばに立てて来たものであります。

戦中戦後住民の心にも余裕が出て、宗箇祭も途絶えておりましたが、昭和五十四年（一九七九年）十月、お家元様をお迎えして復活第一回を奉納できました。

それから二十四回目の追慕祭を本日みな様と共に奉納出来たのであります。家元様を始め多数のみな様をお迎えできましたことを感謝申し上げる次第であります。

昨年は宗箇様お逝くなりになって三百五十年の記念行事として、広島県と佐伯町の記念事業への助成等あり、地域を挙げて東家を建て、道もよくし、みんなで青石を拾い、宗箇桜にと名付けて三百八十本余の地域の所々へ植えました。宗箇様のお好きだった枝垂れ桜を、またエバ山桜も、また神楽「岩船」が上演され、共同企画様のご協力によって宗箇様とのご縁を図説して下さったパンフレットを、地域の主婦の方を中心に、岩船の砂を乗せて焼成した浅原茶碗をつくりお茶席でみなさんが親しくおあがり下さいました。宗箇様のご縁と喜こんで頂きますなど追慕を深くさして頂きました。

岩船の水も今日も筧（かけひ）新しい青い竹筧より爽やかな音色で流れつづけています。宗箇様もお喜び下さっていてくださることと存じます。

宗箇講追慕祭の奉納にあたって日夜連日ご苦労下さいました西公民館、活気ある浅原を創る会、女性会、実行委員会のみな様に、また今日のお祭りの奉納にあたって陰に陽にご協力賜りました皆様お礼申し上げます。

終わりになりましたが、改めて上田お家元様に厚くお礼申し上げまして、上田主水正重安宗箇様から浅原に、佐伯町に賜りました友愛の文化がこの私たちの山河に私たち人々に、心に、脈々の岩船の水のように伝わっていますことを感謝し慶祝し、追慕のことばと御祝いを御礼のご挨拶といたします

錦秋や
岩船の水

宗箇様

てつ草

平成十四年十一月九日
宗箇追慕祭
実行委員会
代表浅尾哲三